

初級中国語学習者に対する?了?の教授法に関する試み

著者	趙嵐, 籠谷 香里
雑誌名	研究論集
巻	116
ページ	105-120
発行年	2022-09
URL	http://doi.org/10.18956/00008056

初級中国語学習者に対する“了”の教授法に関する試み

趙 嵐

籠 谷 香 理

要 旨

中国語の助詞“了”は、ピンイン習得などを含めた基礎文法を中心とした入門段階を経た後の初級段階で導入されることが多い。学習者にとっては、習得困難な文法項目であり、中国語をマスターするための難関の一つと言える。しかし、現在のところ、日本人の中国語学習者が“了”を学習する際抱えうる問題点をまとめ、さらに“了”の誤用を防ぐような教授法についての研究はまだ不十分と言える。

本論では、200人の中国語初級学習者に書かせた300字以上の作文における“了”の誤用例について分析した結果を踏まえ、その誤用に至る原因と誤用を防ぐための教授法について探求する。

分析結果として“了”の誤用は、“了”の欠落、“了”の濫用、“了_{実現}”と“了_{変化}”の混同という3パターンが顕著であることが分かった。従って本論ではその3パターンに分けて“了”の誤用について考究し、誤用予防の対策と教授法の提案をまとめた。

キーワード：実現発生、変化、情報伝達、誤用分析、教授法

1. はじめに

中国語の助詞“了”は文法的には、機能上と構造上の特徴に基づき、動態助詞と語気助詞という二つの役割がある。多くの文法書や教材は“了”を“了₁”と“了₂”に分けている。“了₁”は動態助詞で、動作の後に置き、「動作行為の完成」或いは「動作行為の実現」を表す。“了₂”は文末助詞で、新事態の発生を確認する働きをする。“了₁”と“了₂”は動作行為の完成と新事態の発生には、意味が重なる部分もあり、用法が分かりにくい。¹⁾

“了”については、他にも幾つかの用法があるが、ここでは初級段階の用法のみに絞る。そして、本学の中国語初級教科書では“了”を“了₁”と“了₂”という言い方に分けられていないため、本稿では「実現・完了の了」と「変化の了」とし、“了_{実現}”と“了_{変化}”と記す。

2. 学習者の誤用

外国人にとって“了”の習得は、中国語学習における最大の難関と言ってもよいであろう。筆者は、中国語学習歴1年間未満の学習者200人が書いた300字以上からなる中国語作文を基に、“了”の誤用例を収集し、その誤用例の種類を名詞文、形容詞文、動詞文の三つに分けた。

2.1 名詞文における“了”の誤用

中国語では、名詞性成分のフレーズが述語となる場合があり、そのような述語から構成された文を名詞述語文と呼ぶ。²⁾

(1) *昨天星期三了。 (○昨天星期三。)

(2) *我去年20岁了。 (○我去年20岁。)

誤用例(1)と(2)は学習者が「昨日は水曜日でした」、「私は去年二十歳でした」というつもりで、過去の時間を表すには日本語で「だった」という過去形にするので、同じく中国語の文にも「…した」と訳されている“了”をつけてしまったのであろうと推察できる。実は“了”は過去を表すマーカーではなく、動作の実現、状態の変化を表し、過去の時間帯にある客観的事実を述べる時に使われるわけではない。「名詞述語文に“了”を使う場合は、その名詞性成分には、変化の意味が含意されていなければならない」³⁾

例えば：

“中学生了，还这么淘气！” (中学生にもなって、まだこんなにいたずらなんて。)

“他二十岁了。” (彼は二十歳になった。)

“都几点了，你还不起床？” (何時だと思っているの、いつまで寝ているの。)(荒川2013 128頁)

年齢や時間の移り変わりのほか、「中学生」というのは、人間の成長過程での変化を表す。

2.2 形容詞文における“了”の誤用

述語になる形容詞成分の後ろに“了”がついた場合、その形容詞が表す状態に変化したという意味を表す。

“他现在聪明了” (彼は今賢くなった。)(張文青2012 105頁)

学習者が作った形容詞述語文では、過去形に関する誤用例をよく見かける。

(3) * “我们在意式餐厅吃了披萨和意大利面，那个菜很好吃了。”

(4) * “几年前，中国人的“爆买”很有名了”

(5) * “虽然我觉得有些中国人不友好了，但是中国留学生和中国老师对我们很好。”

誤用例(3)の学習者の意図は「私たちはイタリア料理店でピザとパスタを食べて、とても美味しかった。」誤用例(4)の学習者の意図は「数年前、中国人の爆買は有名だった。」そ

して誤用例 (5) は「私は一部の中国人は友好的ではなかったと感じていたが、中国人留学生や中国人の先生は私によくしてくれている。」というのが学習者の意図であった。「美味しかった」、「有名だった」、「友好的ではなかった」は過去時間帯における物事の状態であり、学習者は“了”をそのまま「過去の状態を表すもの」だと勘違いした結果、上記のような間違いが起こしてしまったと推察できる。

実は中国語においては、形容詞の現在、過去、未来の形はすべて同じである。従って、形容詞の後に使う“了”は状態の変化を表しており、過去を表すものではない。そのため、状態の変化が表されない形容詞文は、過去のことを表すとしても“了”を使うことは許容されないものである。上記の (3)、(4)、(5) は“了”を取れば、正しい文になる。

(6) * “但是现在上大学后又有机会学习中文了，我非常高兴了。”

(7) * “我觉得这件红色的旗袍很漂亮，心里很开心了。”

誤用例の (6) と (7) は学習者が「嬉しかった」と表しているが、心理状態の変化のため、中国語においては“了”は使わない。さらに、もし学習者が「とても嬉しくなった」と表したかったとしても、中国語で“我很高兴了”と言うとやや不自然な文に感じる。気持ちの変化でも“了”を使うと思われがちだが、この場合はやはり“我非常高兴”“我心里很开心”となる。劉月華は、中国語の形容詞を以下のように分類している。⁴⁾

形容詞⇒①形容詞

②形容詞と他の品詞の兼類⇒ 形容詞と動詞の兼類

形容詞と副詞の兼類

形容詞と名詞の兼類

実は“高兴”、“开心”はいずれも形容詞と動詞の兼類語であり、「嬉しい、愉快だ」という形容詞的用法と「喜ぶ、嬉しくなる」という動詞的用法がある。即ち、その言葉にはすでに気持ちの変化が含意されているので、わざわざ変化の“了”を使う必要がないのである。

もし、前は不機嫌な気分だったが、今は機嫌が直ったという気持ちの変化を強調する場合は、“他高兴起来了”（彼は嬉しくなった）のように、“高兴”と補語の“起来”を一緒に使用するのがよく見られる。従って、形容詞が述語となる文は過去形であろうとも、一般的に“了”を用いないことを一つの構文規則として学習者に記憶してもらうことができよう。

2.3 動詞文における“了”の誤用

動詞文における“了”の誤用例は種類が多いため、“了”の欠落、“了”の濫用、“了_{実現}”と“了_{変化}”の混同という3パターンに分ける。そして、“了”の濫用をさらに六種類に分けて、使っ

てはいけない部分で“了”を使ってしまった原因を分析する。

2.3.1 “了”の欠落

2.1と2.2で状態の変化を表さない部分で“了”を使用した誤用について説明したが、一方で、変化の意味を表している部分で、“了”を使用しなかった誤用もある。

- (8) * 而且我有(了)自信, 对学汉语也更感兴趣了。
 (9) * 我第一次在初中学习英语, 老师带给(了)我学习英语的乐趣。
 (10) * 高中的时候, 我去过英格兰, 认识(了)很多中国学生。
 (11) * 一个小时后, 我终于找到(了)一个中国学生。
 (12) * 回答对日本印象不好的中国人的比例减少了6%, 变成(了)86%。
 (13) * 当我无法应对时, 一位中国人用Google 软件将汉语翻译成(了)日语。

“了”の欠落というのは、“了”を用いるべき部分で、用いなかったことを示す。この欠落の誤用は、動作性を伴わない動詞文でよく見かける。例文(8)の“有”、(9)の“带给”、(10)の“认识”も非動作動詞、いわゆる状態動詞で動作性に欠けており、“了_{実現}”の必要性が分かりづらいため、欠かしてしまうのではないと思われる。

また、「動詞+結果補語」の後に、学習者はよく“了_{実現}”の使用を忘れる傾向が見られる。これは、“了_{実現}”と結果補語の類似性が問題と思われる。つまり、動作の実現を表す結果補語があれば、“了_{実現}”を用いる必要がなくなると学習者が勘違いしているのである。(11)の文は“找到”の後に“了_{実現}”をつけるべきであるが、学習者が使わなかった理由として、“找到”は動詞“找”と結果補語“到”の組み合わせだと考え、結果補語は動作の結果を表し、一種の実現という意味が含まれるので、“了_{実現}”の出番はないだろうと学習者が思い込んだゆえの間違いだと推察できる。同じように、(12)文の“变成”と(13)文の“翻译成”も動詞の“变”、“翻译”と結果補語“成”の組み合わせになり、学習者は動詞と補語の形のみに注目し、“了_{実現}”の必要性を感じなかったようである。本学では、結果補語の学習は一年次の秋学期で、まだ初級段階にある。“了”が含まれている結果補語の例文はよく出されているが、“了”の必要性はそれほど強く伝わっていない可能性が無いとは言えない。

実は、結果補語は動詞の直後につけて、動詞と一体化した複合動詞となり、事態の結果はその事態が実現して現れるので、しばしばアスペクト助詞“了”と共起するのである。ゆえに、「動詞+結果補語」の状態が実現しているのであれば、“了_{実現}”が必要なのである。

2.3.2 “了”の濫用

“了”の誤用例の中で最も多いのが、使うべきではないところで“了”を使ってしまうことである。その原因は、動詞の種類であったり、文の構造であったり、日本語の「た」との混合であっ

たり、様々である。この節では、動詞述語文における“了”の濫用の形態、原因を考察する。

2.3.2.1 心理状態動詞文

呂叔湘によれば、心理動詞や持続性の強い動詞には動作の完了、実現を表す助詞として“了”をつけてはならない。心理状態動詞は知覚、認識、心理活動を表し、アスペクトとは関係しない。したがって、アスペクト助詞の“了”がつくことはない。

- (14) * 他们用竹子组装脚架，我一看就很惊讶了。
- (15) * 我一听这些内容，就很吃惊了。
- (16) * 我朋友听了妈妈的话，就很担心了。
- (17) * 那么，在中国受欢迎的菜是什么呢？我很想知道了。
- (18) * 我也以为时尚的“抖音”是日本的，但是一问才知道是中国的。
- (19) * 我这个暑假去上海了，我非常感动了。

心理状態、気持ちの変化を表すときに、日本語では「驚いた」、「びっくりした」「心配になった」、「思った」、「感動した」などというので、学習者は中国語の心理動詞の後にも“了”が必要だと勘違いしているようである。実は中国語では、過去の心理状態であっても“我很惊讶”、“我很吃惊”、“我很担心”、“我很想知道”、“我也以为……”、“我非常感动”のように“了”を添えることなく表す。

2.3.2.2 過去の状況、事実の説明

学習者は過去の時間帯に実現、完了した動作について述べる時は常に“了”をつけたいという傾向がみられる。確かに、“了_{実現}”の核心的な文法的意味は動作行為の実現・完了を表すことだが、すでに実現・完了した動作を表す場合、すべての動詞の後ろに“了”が使われるわけではない。

- (20) * 他来我的学校留学，我们一起学习了。
- (21) * 她是我第一个工作的前辈，以后我们经常谈话了。
- (22) * 刚开始的时候很难与她沟通，只能用英语相互会话了。
- (23) * 我在兵库县神戸市出生并长大了。
- (24) * 当地学生们对我们很好，他们在大门口向我打招呼了。
- (25) * 我小学的时候第一次坐了飞机，就开始憧憬着成为一名空姐。

(20) から (25) までの誤用例はすべて過去の事実を説明する文であるが、“了”をつけてはならない。例えば (21) のような過去の経常動作を述べる時に、日本語では「た」が用いられるが、「中国語では頻繁に行う動作には繰り返しがあ、実現・完了したと言えないので、“了”は用いられない。」⁵⁾

書き手の伝達意図の重点または焦点が「すでに実現・完了した」動作行為にある場合にのみ、当該動詞の後ろに“了”が用いられる。もし書き手の表現意図の重点・焦点が動作行為の実現・完了ではなく、状況説明や出来事に関する叙述であるなら、普通“了_{実現}”は用いられない。誤用例の文では、「一緒に勉強していた」、「話し合っていた」、「会話した」、「生まれ育った」、「挨拶してくれた」、「飛行機に乗った」などの動作はいずれも実現した動作であるが、書き手の焦点はこれらの動作が実現したことではなく、その時の状況、事実の説明に置かれているはずである。つまり、過去の現象・事実を伝えることは一種の状況説明なので、“了_{実現}”は使い難い。

また、上記のような日本語で「…ていた」という恒常性を表すような場合も“了_{実現}”は使い難いと言える。

2.3.2.3 目的語が動詞フレーズや文の形

目的語が動詞、動詞フレーズ、主述フレーズなどの述語性の成分である場合は、述語動詞の後には一般的に“了_{実現}”を使わない。なぜなら、文の重点・焦点は述語になる動作が実現・完了しているかどうかに関わらず、後の目的語であるフレーズが表す事柄に置かれているためである。

(26) *那天, 我決定^了要更努力地学习汉语。

(27) *我发现^了媒体报道的一切不都是真的。

(28) *在日本的新闻报道看过^了好多次没有礼貌的中国人。

(29) *我从你们那里学到了遇到^了困难也不放弃的重要性。

(26) 文の焦点は「決めた」という行為でなく、「これからもっと中国語の勉強を頑張る」という決意の内容にあるため、“了_{実現}”の出番はない。つまり、“了”は動詞後につけて動作の実現を表すことができるが、話し手が伝えたい情報は動作の実現でなく、その後ろに続く内容である場合、“了”を使用しないことを教員は学習者に対して言及したほうがいいと思われる。

(28) の文では、動詞とアスペクト助詞“过”という組み合わせの後に目的語が続く場合は“了”を伴うことはできない。(29) の文では、動詞と結果補語“到”という組み合わせの“学习到”の目的語は名詞フレーズであり、“学习到”の後ろに“了”をつけることはできるが、目的語になる名詞フレーズの中の動詞“遇到”は連体修飾語になるため、後に“了”を使用しない。その理由として、文の焦点は勉強した具体的な内容、つまり「困難にぶつかっても諦めないことの大事さ」にあり、ぶつかる動作の実現にはないからである。

また、目的語は文の形になるという直接話法、間接話法の文には“了”の誤用もよく見かける。

(30) * 我问^了他：“你想去中国的哪个地方”

(31) * 听她说^了我跟她在一样的车站下车，所以我们聊聊了（聊了聊）。

(32) * 汉语课，老师说^了中国人是早睡早起。

(30) から (32) までの文は全て“了”をつけてはならない誤用例である。誤用の理由として、学習者はまず日本語訳で「～と言いました」、「～と尋ねました」とあるので、それをそのまま中国語訳して、“说了”“问了”となってしまったと推察できる。

具体的な事実を叙述する際、発話時にその動作行為はすでに実現・完了している場合が多いが、「中国語では出来事の一連のプロセスや経過を叙述する場合には、その焦点は話すという動作が実現・完了しているかどうかにかかわらず、その出来事の進展や話の内容そのものに置かれているため、直接話法や間接話法の文中に“了_{実現}”は用いられない。」⁶⁾

しかし、伝達の内容よりも「話す」という動作自体をしたか否かという意味に重点が置かれているのであれば、例えば“我说了我去”の文では話者は自分が行くと「言った」という動作を強調する場合は“了”を使用することがある。

そして、(31) の文では、「少し話し合った」という意味で“聊聊”という動詞の重ね型を用いているが、“了_{実現}”を文末につけてしまったという間違いを起こしている。動詞の重ね型は一年次秋学期の学習項目で、春学期の“了”の学習後となる。動詞の重ね型の練習は出されているが、「A了A」、「A了AB」のような形は特に提示されていないため、学習者が誤用を起こしたのであろう。

2.3.2.4 可能性との混同

本学では、一年次春学期に「動作実現、状況変化」の助詞“了”と「習得してできる」の助動詞“会”を学習する。従って、「習得の“会” + “了” (～できるようになる/なった) という文型は学習者にも紹介されている。そして、秋学期に未来の可能性を表す「～でしょう」、「～のはずだ」の助動詞“会”を学習するが、実際の状況では、未来の可能性を表す文を作る時に学生が“会”を使わない傾向がみられる。さらに、秋学期の後半に「もうすぐ～する」を表す文で、“就(要)/快(要)～了”を学習するので、学生が“了”のみでも「未来に発生する変化を表すことができる」と勘違いしている可能性がある。しかし、“了”が未来に発生する状況変化を表すには“就(要)/快(要)”と組み合わせなければならない。単独の“了”は新状況の出現、動作の継続を表しはするが、普通は未来を表す文では使用しない。

(33) *我觉得中国的世界遗产今后也(会)增加^了吧。

(34) *我的学长经常对我说：“去中国留学后，(会)比你想象的更快会说汉语^了”

(35) *明年我去中国留学，要交喜欢游戏的朋友，从今以后也(会)沉迷于中国的游戏^了。

(36) *当我变得能说世界第一语言的时候，自己的生活(会)更便利^了。

(37) *我要更加努力学习，将来成(为)^了一名空中小姐。

(33) から (36) までの文は今後に起きる変化についての推測であるが、“会”のかわりに“了”を誤用してしまっている。その原因は、学習者が変化の“了”の使い方を十分に理解していな

かったためだと思われる。

また、(37)の文は書き手が「将来、キャビンアテンダントになる」という未来の目標を言うのであり、この場合は中国語では“成为”「～になる」を使う。“成了”と言うと「将来、キャビンアテンダントになった」という矛盾した意味の誤文になってしまっている。

2.3.2.5 連体修飾語（節）における誤用

動詞（動詞フレーズ）が名詞の連体修飾語（節）となる時、日本語では、「動詞＋タ＋名詞」の形になるが、中国語では、必ず“了_{実現}”が使用されるわけではない。動詞（動詞フレーズ）の後に“的”を付けて、「動詞＋的＋名詞」という形になるのがふつうである。とはいえ、「動詞＋的＋名詞」の形は必ずしも日本語の「動詞＋タ＋名詞」と等しくないのである。なぜなら、「動詞＋的＋名詞」は過去にも、非過去にも両方の意味が読み取れるからである。即ち、「動詞＋的＋名詞」の形は日本語の「動詞＋ル＋名詞」と「動詞＋タ＋名詞」の両方に対応しているわけである。⁷⁾

(38) *第二个，是9个月以前去_了的香港。

(39) *这里的“香料”指的是给予_了我们刺激的东西。

(40) *因为决定去留学，所以想在完全掌握_了中文的时候，先说一口流利的中文。

(41) *我现在在大学学习中文，是因为有这些给我留下_了许多回忆的人们。

(42) *我要在中国加油学习汉语，我回国_了的时候，要提高我的中文水平。

(38)の文では確かに「行く」という動作の実現だが、しかし、動詞“去”の後ろには“了_{実現}”をつけてはいけない。それは、この文では「9ヵ月前に行った」という動作の時間に焦点が置かれて、「行く」という動作単体の実現・完了には置かれていないからである。

(39)、(40)、(41)の文はすべて動詞の後の“了_{実現}”の誤用例である。三宅登之は動詞の後の“了_{実現}”はその動詞を前景化し、またその動詞をフレーズの焦点にする働きがあるため、背景の動詞になる動詞には“了_{実現}”を用いないと述べている。さらに、動作行為の背景になる“～的时候”や“～以前”を用いる文には“了_{実現}”を用いられない。⁸⁾

(42)の文では、時間を表す従属節において、書き手が最も伝えたい情報は動作「帰国する」が実現したということではなく、主節の動作が行われた時間である。

(43) *我想，努力_了的话一定能实现这个梦想。

(44) *我要是去中国_了的话，有一件想做的事，那就是吃包子。

(45) *去外国或亲眼看过_了外国的中国人的话，我觉得比较容易接受文化差异。

また、(43)～(45)のように、「動詞＋的＋名詞」という構造に“了”をつけてしまう誤用例は仮説文の中にも見られる。動作の仮定実現に“了”をつけることはできるが、しかし、仮説文型“(如果)～的话”(もしも～たら)は“動詞＋的＋名詞”と同じように動詞の後に“了”

は使用しないのである。

従って、“～的时候”、「動詞+的+名詞」のような文を作るときに、従属節にある動詞の後ろに“了”を使用しないことを学習者には提示し、練習させることができよう。

2.3.2.6 二つの“了”構文の誤用

単文の中で二つの“了”を用いるのは、秋学期で学習する文法項目である。教科書では以下の例文が出されている。

“你学了多长时间汉语了？”（あなたはどれくらい中国語を学んでいますか？）

“我学了一年多了。”（私は「もうこれで」一年中国語を学んでいます。）

“了”を二つ使う場合、一般的に前の“了”は動作の実現、後の“了”は状態の継続を表す。つまり、文末の“了”によって現在まで引き続き動作行為が行われていることが示される。従って、動詞の直後と文末、2カ所に“了”が置かれている場合「継続中」であることを表すと学習者が覚えて、どんな継続態の文でも二つの“了”構文が使えると勘違いしている可能性がある。しかし、この構文が使えるのは一般的に述語が持続動詞になる場合であり、さらに時間詞、量詞などのような動詞の期間や時間の経過を表す要素が文に入っているのが普通である。例えば“我学了一年多了。”はすでに中国語を一年間勉強したという意味だけでなく、今も、これからも勉強していくようなニュアンスが含まれる表現になっているのである。

(46) * 我在学习汉语的时候，她帮助了了我了。

(47) * 她人好，所以我们就交了朋友了。

(48) * 我的汉语水平不仅得到了提高，而且还升华了自己。

(49) * 粗鲁的举止和赝品成为了中国全体的形象了”

(46) と (47) の文中の動詞“帮助”「助ける」、「交」「(友達を)作る」は持続動詞になりにくいいため、不自然な文になったのである。さらに、(48) 文の“得到”、(49) 文の“成为”はいずれも「動詞+結果補語」の組み合わせで、継続態になりにくいいため、誤文になったのである。

2.3.3 “了”の位置間違い

ここまで見てきたように、“了”は動詞のすぐ後に置く時もあり、文末に置く時もあり、また動詞のすぐ後と文末の両方に置く時もある。このように“了”の位置は多種多様なため、初級学習者だけでなく、上級学習者からも「文のどこに“了”を置けばいいかわからない」という声はよく上がる。

(50) * 夏天我们去了USJ，我们穿了颜色一样的服装了。→穿了

(51) * 她也一起在舞台上唱日语歌了，而且我们获得了银奖了。→获得了

(52) * 她告诉我：“那是因为你，我有你这样的朋友了，所以，我爱你和日本。”→有了

(53) * 因为我喜欢吃鱼，所以我吃鱼了。→吃了

(54) * 秦始皇公元前221年统一中国了。→统一了

(55) * 她对我说：“我们会再见吧”。这句话鼓励我了” →鼓励了

“了_{実現}”の使用条件は多数あるが、その中でも重要な二つが挙げられる。一つ目は「具体性」原則、即ち、“了_{実現}”は近い過去に行われた具体的な事実を伝える際に使われる。「その際、動作の目的語はいつも具体性を示さなければ文は完結できない。つまり動作行為の実現・完了の具体的な確認が欠けた場合は、言い切りの文として認識されず、後続の動作行為の条件や仮定を表す複文の前半として受け取れてしまう。文を完結させるには、修飾語か補語を用いて、出来事を具体化しなければ、聞き手はもっと大切な情報が後に来ると認識し、文は完結していないと感じる。」⁹⁾

従って、孔令達の情報伝達論による、「V+了_{実現}+特殊目的語」という方程式が産出される。

*他吃了药。⇒ 他吃了毒药。(彼は毒を飲んだ。) (張文青2012 110頁)

*我吃了饭。⇒ 我吃了三碗饭。(三碗のごはんを食べた。)(張文青2012 110頁)

(50) の着る動作の目的語、(51) の獲得した動作の目的語、(53) の出来た動作の目的語はいずれも具体性を備えているため、“了”の位置は文末ではなく、動詞の直後に置くべきである。

そして、(53) から (55) までの文では目的語がハダカの名詞になり、具体性を供なっていないため、文末に“了”を置くはずだと学生が思い込んだ可能性がある。しかし、情報伝達論の角度から目的語は特別なものや非経常的に行われた動作行為であれば、文を完結できる。(53) の文では、魚が好きなので、その日も魚を食べたという意味で、「魚」は特定された目的語になる。(54) の文では、「始皇帝が国を統一した」という動作は非経常的な動作であり、統一した目的語は特定の「中国」である。そして、文の焦点も「統一した」という動作に置かれるのではなく「七つの分立国から成り立った中国」に置かれているのである。(55) の文では、彼女が言ったことによって励んだ対象は特定の「私」であるため、“了”を動作のすぐ後ろに置かなければならない。

このように、情報伝達論によれば、「V+了_{実現}+特殊目的語」という方程式が産出されるが、“了_{実現}”の後に来る目的語は具体的であったり、修飾語がついている形もあり、単純なハダカの形という場合もある。そうになると、学習者は目的語の形で“了_{実現}”の位置判断ができなくなる。そういった場合には、二つ目の「焦点」原則を覚え、書き手のもっとも伝えたい情報は動詞自体なのか、それとも目的語なのかによって判断する必要がある。従って“了”を日本語訳する前に、上記してきたように、まずは文全体や、文の焦点がどこなのかを明らかにしてから“了”の位置とその働きについて逐一学習者に考えさせる。それを繰り返すことで、学習者自身が例えば、動作の実現・完了に焦点が当たっているのか、あるいは後ろの目的語(状況の説明)に当たる部分に重きが置かれているのかで、“了”の位置やその機能に違いがあること

に気付いていくのではないだろうか。

3. 誤用の原因

3.1 「た」との混同

中国語の“了”と日本語の「た」は、動作が実現したことを表せるという共通点がある。例えば、“我买了一个苹果”を日本語に訳すと「私はリンゴを1つ買いました」となるので、単純に「了」の文章は過去形」だと思ってしまうが、決して「了=た」という単純な用法ではない。

多くの教科書では、完了・実現の“了”を「～した」と訳し、そのため、日本人学習者は両者とは等しい関係にあると思いがちで、「～した」ことを表す文にすべて“了”をつけてしまう誤りをしばしば犯す。しかし、ここまで分析してきたように、中国語においては「実現・完了」の表現に“了”をつけなくてもよい場合は多くあり、つけてしまうと却って不自然、不適切な表現になる場合も多い。そのため、学習者はますます“了”の使用に困惑する。

また、日本語の「た」の位置はほぼ決まっているのに対して、中国語の“了”の位置は一通りではない。従って、“了”を動詞の直後に置くか、文末に置くか、また両方に置くかという語順に関する戸惑いによる誤用も少なくない。

3.2 英語の過去形時制との混同

多くの初級学習者は、英語学習を外国語学習の基礎としているため、その第一外国語の負の転移により、過去に行われた動作ならば、すべて動詞に“了”をつけるという誤りを犯す。英語の場合、現在形・過去形・未来形を表現する時、動詞の形を変えることで明確に時間軸が決まる「時制」があるのに対して、中国語には明確な時制というものはない。しかし、文法的な時制はなくとも、過去・現在・未来という時間の概念はある。過去や未来を区別する場合は、その時の「過去を表す時間詞・時間副詞」、「会話の背景」、「動作の状況」などによって時間の表現を決めることができるのである。

3.3 発想の相違

時制がない中国語は、動詞の活用によって過去や未来を表すことができず、動作が完了した、実現したという相対的なアスペクト表現（日本語では「相」という）で、動作・行為が今どの段階なのか、動きの段階や状態を表すのである。「完了・実現ということ、過去形のような印象を持ってしまいがちだが、実は過去と完了とは全く異なる概念で、過去とはテンス（時間の流れ）の概念であり、完了はアスペクト（動作の段階）の概念である。一つの動作は開始、

継続、完了という異なった段階にあり、どの段階でも過去、現在、未来という時間点に存在できる。これはテンスとアスペクトには共通点があり、相違点もあり、区別して対処するべきである。」¹⁰⁾

現代日本語では完了形に当たる形式として「ている」がある。これは過去完了「ていた」や未来完了「ているだろう」の表現にも使える。このような規則的・体系的に表示するようなシステムは中国語にはない。また、「時間を表す名詞や副詞が生じなくても動詞の語尾変化でテンスが表せる日本語に対して、中国語はそれらの名詞や副詞がなければテンスが表現できない言語である。」¹¹⁾

このように、日中両言語の発想の相違も日本人学習者にとっては“了”が習得しにくい原因のひとつとなっているのであろう。

4. 教授法の提案

“了”の文法的意味は難しく、初級だけでなく、中級・上級学習者も長い中国語学習の道でずっと“了”と苦闘し続ける。その学習意欲を初級段階で諦めないようにするためにも、“了”の教授法を見直す必要がある。本論にはこれまでの分析を踏まえて初級中国語における“了”の教授法を提案する。

4.1 “了”の訳語を考え直す

筆者は入門・初級中国語のテキスト10冊を調べて、“了”の訳語を表Iにまとめた。

表 I

完了の“了”	変化の“了”：
「～した」	「～た」「～になった」
「～した」	「～た」「～ようになる」
「～した」「～している」	「～になった」「～になる」
「完了・実現を表す」	「変化を表す」
「～した」	「～になった」
「完了を表す」	「変化を表す」
「～した」「実現・完了を表す」	「～になった」
「～した」	「～になった」
「完了を表す」	「～になった」
「～した」	「～となった」「～となる」

表Iでまとめたように、半数以上の教科書では“了_{実現}”の意味が「～した」と訳されている。この訳語自体に問題があるわけではないが、学習者に「了=た」もしくは「了=過去形マーカー」だという誤った印象を与えてしまう可能性は否定できないであろう。従って、上記してきたように、“了”単体を具体的な日本語に訳すというよりは、文全体、文の主語や目的語、その他にも文の焦点がどこなのかなどを常に学習者に考えさせながら、“了”の役割や位置について明確にしていくのも一つの誤用対策だと思われる。

我到了。⇒“了_{実現}”（私は到着した。）

冬天到了。⇒“了_{変化}”（冬が来た。/冬になった。）

例えば、“了”の日本語の意味というより、その役割で説明してみると、上記の2つの例文のように、“到”自体は動詞だが、動詞直後の“了”が必ずしも“了_{実現}”であるとは限らない。この2つの文の主語を見ると、一方は「私」つまり「人」で、もう一方は「冬」つまり「季節（時間）」である。“我到了”は「私が到着するという動作の完了」を表しているので、“了”は“了_{実現}”となる。しかし、「冬」つまり「季節（時間）」は移り「変わる」ものであるので、“冬天到了”の“了”は“了_{変化}”ととらえるべきであろう。このように説明していくことで、学習者の「動詞直後の“了” = “了_{実現}”という思い込みに歯止めをかけることができるのではないだろうか。

4.2 予防策を講じる

ここまで、初級中国語学習が書いた作文における“了”の誤用例について分析してきた。“了”の欠落、濫用、位置間違いの原因を把握できていれば、適切な時に典型的な例文を挙げたり、注意点を提示したり、“未雨綢繆”（転ばぬ先の杖）的な説明が可能になる。

これを実現するには、学習者の“了”に対する誤解や不明な点などがある程度予測できる能力を備えていることが教員側に要求される。そのため、普段“了”を教える中で、学習者の誤りを訂正するだけでなく、学習者がどのようなつもりで誤文を作ったのか、その誤用が生じる原因を常に考えて、母国語の負の転移によるか、第一外国語の負の転移によるか、アスペクト表現の理解不足によるか、時折学習者の視点から“了”の使用難点を考えることが必要だと思われる。即ち、“知己知彼，有的放矢”（学習者の発想を把握し、明確な目標を持って教える）というような“了”の教授法を工夫するのが望ましい。

具体的には、学習者が作る中国語文には、常に学習者自身で日本語訳を付けるようにさせる。そうすることで、学習者がどういった意図でその位置に“了”を付けたのかが見えてくるはずである。また、教員側としても、学習者の間違いの傾向をさらに把握できるようになると思われる。

4.3 多様な練習

初級学習段階では、“了”の基本的役割は動作の完了、状況の変化、状況の持続の三つで十分だと思われるが、「完了」と「変化」という説明だけで学習者に“了”の使い方を十分に理解させることは難しいのが現状である。そもそも日本人学習者にとって動作の完了や状況の変化という発想は中国人ほど強くないようで、“了”の基本的役割を習得させるには多様な練習が必要である。

まず導入段階から、「動詞＋“了”＋目的語（修飾語などを付けて特定できる）」＝「完了」、
「名詞／形容詞／（文の区切りや文末）＋“了”」＝「変化」という文型を提示するだけでなく、例えば、動詞の後の“了”は過去を表すマーカーではなく、あくまでも「動作の実現・完了」を表すものであるので、動作単体の明確な実現に焦点が当たっていないと使えないことを明言しておく。そして文全体を見て、どこに焦点が当たっているのかをよく考えてからその文の“了”の位置や働きについてはっきりさせるのが肝要であると思われる。

形容詞や名詞の後に“了”が付く場合も、そもそも“了”を付ける以前に、中国語の名詞と形容詞には過去形という形はないので、そのままの文で使うことをまず明確に教えておくことが必要であろう。形容詞述語文や名詞述語文の段階で「形容詞／名詞だった」の中国語文を練習させ、中国語はそのままの文であることを強く印象付けておくと、形容詞や名詞の後ろに“了”が付いた場合も、「形容詞／名詞だった」とはならず、形容詞／名詞の状態に変化した＝「形容詞／名詞になった（なる）」という「変化」を表すことになるということが分かりやすくなるのではないだろうか。

4.4 “举一反三”の考え

第2節で示されている動詞文における“了”の誤用が最も多い。それは動詞文構造の複雑性と関係していると思われる。本学部の一年次教材では、存在文、存現文、連動文、可能文、経験文、結果補語文などの動詞文型を教えている。従って、誤用例には変化の“了”と可能の“会”、完了の“了”と経験の“过”、完了の“了”と結果補語の混同をよく見かけた。教員はこれらの動詞文を教える際、意図的にその文型に“了”の使用が可能かどうか、文のどこに置くか、どのような意味を表すかなどを常に学習者に考えさせる。このような“举一反三”（一つから類推して多くを知る）という教授法は新知識の理解に役立つだけでなく、“了”の習得にも繋がると思われる。

5. 終わりに

中国語の“了”は複雑な言語表現であり、その性質と機能はしばしば議論の対象となる。

この中国語学習上級者であっても難しく、厄介な“了”を初級学習者が習得することは正に“难上加难”（至難の業だ）といえよう。しかし、中国語の“了”を使いこなすことができれば中国語の語感は確実に向上し、本当に中国語を習得しているということが言えるだろう。そのためには、学習者の努力は勿論、良い教材と良い教授法が不可欠である。良い教授法はさらに「効果的な解説」と「効果的なトレーニング」の二つに分けることができる。学習者の中国語力を育てるために、教員は常にこの二つを工夫し続けなければならない。

ここまで“了”に関して誤用予防の対策と教授法の提案をまとめてきたが、まだまだ至らない部分もあり、今後とも“了”の教授法を引き続き模索していきたい。

注

- 1) 興水優、島田亜美（2009 374頁）
- 2) 三宅登之（2010 28頁）
- 3) 方曉娟（2007 138頁）
- 4) 劉月華（1996 205頁）
- 5) 方曉娟（2007 139頁）
- 6) 張文青（2012 110頁）
- 7) 張金艷（2006 251頁）
- 8) 張文青（2012 111頁）
- 9) 張文青（2012 109頁）
- 10) 方曉娟（2007 135頁）
- 11) 劉琛琛（2010 62頁）

参考文献：

- 荒川清秀（2015）『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社
興水優、島田亜美（2009）『中国語わかる文法』、大修図書館
木村英樹（2017）『中国語はじめての一步』東京、筑摩書房
孔令達（2005）『漢語研究論集』、安徽大学出版社
競成（1996）『汉语的成句过程和时间概念的表达』语文研究 山西省社会科学研究所以No 1
方曉娟（2007）「中国語の助詞「了」をめぐる教学」、愛知大学語学教育研究室紀要16号
冯富荣（1998）「中国語の“了”の用法探求」、愛知淑徳大学論集第23号
羅華（2020）「初級及び準中級中国語における助詞「了」の教授法についての一提案」、APU言語研究論叢
第5巻

趙 嵐 籠 谷 香 里

三宅登之 (2010) 「了₁と了₂の相違点とその認知的解釈」、中国語教育学会No. 8

朱德熙 (1995) 『文法講義』 白帝社

呂叔湘 (1995) 現代漢語八百詞〔増訂本〕 商務印書館

張文青 (2012) 「“了” の教授法に関する試み」、APU言語研究論叢第22巻

(ちょう・らん 英語国際学部准教授)

(かごたに・かおり 英語国際学部准教授)